

アーナンダ聖菩提樹について

「釈尊のご不在中に、薫香や華鬘（花輪）を手に祇園精舎を訪れた人々が、礼拝の対象を見いだせず、香室（釈尊のご居室）の入口に手にしたものを置いては、随喜して立ち去った。その経緯を知ったスダッタ居士（アナータピンディカ）は、このようなとき何か礼拝の対象がないものか、如来に聞いて頂きたい、とアーナンダ長老に懇願した。アーナンダ長老が、「礼拝供養する対象は幾つあるでしょうか」と釈尊に伺うと、「①仏舎利②仏陀がお使いになったもの ③仏陀に因んだ聖地 の3種がある。ただし、①は仏陀が入滅した後でないと不可能であるし、③は具体的ではなく心に念じるものである、しかし②のうち諸仏の使用した菩提樹は、諸仏の在世中も入滅後も礼拝供養の対象である」と答えられた。そこでアーナンダ尊者は、釈尊がご不在の間も人々に礼拝供養の対象ができるように、大菩提樹の種を祇園精舎の門の所に植えることを釈尊に提言申し上げたところ、釈尊は承諾なされた。

アーナンダ尊者はスダッタ居士、ヴィサーカ夫人、コーサラ国王に告げ、門のほとりに大菩提樹のための穴を掘らせた。そしてモッガラナ長老が虚空を駆けて菩提座（悟りの場所）へ行き、大菩提樹の枝から落ちる実を地面に届かない内に衣で受け止め、持ち帰った。アーナンダ尊者がこれから菩提樹を植えることを知らせ、再び国王達がやって来て準備を整えると、尊者は実を国王に渡した。しかし王は「王権というものはいつまでも私の手中にないのだから、スダッタ居士が植えたほうがよい」と考えた。スダッタ居士により、恭しく香泥をもって植えられた実は、その場ですくすくと伸び、たちまち祇園精舎の樹の中で最も優れた主となった。」

小部経典 ジャータカ No.479「カーリング王菩提樹前生物語」より抜粋要約

[出典：Kālingabodhi-Jātaka, No.479 参考：「南伝大蔵経」第34巻,「ジャータカ全集」（春秋社）第6巻]

アーナンダ聖菩提樹の起源はお釈迦様の在世中にあり、上記の経典にも記述されています。12～13世紀初頭に行われたイスラム教徒の仏教弾圧により寺院とともに破壊され、現在のアーナンダ聖菩提樹はその後生え育ったものといわれ、今も礼拝の対象として、篤く供養されています。

菩提樹の植え替えについて（参考：「天竺菩提樹を育てる会」HP <http://www.ogaki-tv.ne.jp/~yyy/>）

- この鉢はピートモス（苔の加工品）で出来ており、土に溶けますので、植え替えの際はそのまま土の中に入れられます。
- 菩提樹は乾燥を嫌いますが、水がいつまでも抜けないような土はあまりよくありません。
土は水はけの良い、赤玉、鹿沼、桐生などを混ぜたもの（これに培養土も混ぜた方が良くかも知れない）、培養土と赤玉を半々にしたものでも良い。幼苗ですがあえて直射日光を避ける必要は無いと思います。鉢の下に受け皿を敷いて水を少し張るようにしてください。
- 芽は小さくてもかなり根が下に長く張っているため、植え替えの鉢は底が深いものを使った方が良さそうです。
- 肥料は緩効性の置き肥／液肥どちらでもよいようです。
（液肥の場合は1000倍～2000倍ほどに薄め、1週間～2週間に1度与える）

インド菩提樹（シナノキ属のセイヨウボダイジュとは別種）

- 学名：Ficus religiosa L. / ■分類：クワ科フィクス（イチジク）属 / ■原産：インドから東南アジアにかけて
- タイプ：半落葉樹 / ■栽培：水はけのよい土に植え、日当たりのよい場所で栽培する。春～秋には屋外の日なたで栽培するとよい（日陰にあったものに急に直射日光を当てると、葉が日焼けを起こすので注意）。肥料は春～秋に。耐寒性が強く、0℃前後で越冬する。

（「草木図鑑」http://aquiya.skr.jp/zukan/Ficus_religiosa.html より）